

令和7年度滋賀大学健康セミナー

The 13th Neuropsychanalysis workshop in Shiga

第13回神経精神分析ワークショップ

「臨床家はなぜ意識の問題を考えるのか？」

2025年7月12日(土)17:00～19:00 オンライン開催

[https://shiga-u-ac-jp.zoom.us/j/84320677014?](https://shiga-u-ac-jp.zoom.us/j/84320677014?pwd=GpAkIkw8PbalGVVqN7PvgrXUMrKJE4.1)
[pwd=GpAkIkw8PbalGVVqN7PvgrXUMrKJE4.1](https://shiga-u-ac-jp.zoom.us/j/84320677014?pwd=GpAkIkw8PbalGVVqN7PvgrXUMrKJE4.1)



ご案内

なぜ意識が臨床家にとって問題となるのでしょうか？近頃は脳のことを考える心理臨床家も増えたという話ですが、わたしは臨床の最中、自分に脳があるかさえも気にしません。一体どうして皆さんは脳のことを知りたがるんで？いえ、真面目な話でして...私たちが脳のことを忘れていられるのは、意識の動きがあるからです。その証拠に、例えば脳機能障害のクライアントに接する場合、その応答のぎこちなさから、意識体験の自明さを相手側に想定できない時、意識障害があるかも...と推論します。ですから、意識は私たちが仕事をする上で前提となっているようなフレームなのです。フロイトが心的装置を構想し、さらに今日の神経科学者Karl Fristonや精神分析家Mark Solmsが予測誤差を低減させるメカニズムを意識の動きの基底に置く時、物質と心の二面性を一元的に考察する可能性は残されていないでしょうか？ニューロサイコアナリシスはその思索の基礎に置く二面的一元論は、何らかの答えを与えるというより、そうした議論の可能性を開くものです。本ワークショップでは、こうした問題に多面的な光を当て議論を深めることを目指します。

パネリスト: 秋本倫子(東洋英和女学院大学) 笠井仁(静岡大学) 岸本寛史(静岡県立総合病院緩和ケアセンター) 佐渡忠洋(名古屋市立大学) 成田慶一(京都大学) 久保田泰考(滋賀大学保健管理センター)